

## 「熊野」を歩く

能「熊野」の道行きは、華やかな春爛漫の京の都を舞台にしながらも、六道の辻や鳥辺山など母を案じる熊野の不安な心情が詞章に続きます。

八条高倉の平宗盛邸を牛車に揺られながら出発した熊野の一行は、花に誘われてそぞろ歩く多くの人々の中を五条の橋を渡り、清水寺を目指します。詞章にみえる五条橋は現在の松原橋あたりと考えられます。この辺りは今でも京都の繁華街で季節を問わず沢山的人が行き来するところです。特に桜の季節は東山の桜散策、高台寺、清水寺等の夜間ライトアップ、京都花街の『都をどり』などとも時期が重なり、深夜まで人通りが絶えません。

松原橋からはゆるゆると登り坂が続きます。松原通り右手には六道の辻の碑の立つ西福寺があり、その角を南に下れば六波羅蜜寺です。境内には平清盛の墓石があり、空也上人立像、平清盛坐像なども拝観できます。また、西福寺の西には、乳のみ児に飴を与えた幽霊の話で有名な子育飴のお店があり、そのすぐ西北には小野篁があの世とこの世を行き來した井戸が残る六道珍皇寺があります。丁度、小野篁と閻魔大王の像の前で六道珍皇寺のご住職にお会いし、以前は何万という人たちがお盆のお精霊迎えの六道詣りに訪れた寺だったなどのお話を伺いました。この辺り一帯はあの世とこの世が混在する不思議な場所なのでしょう。「とてもいい音がしますよ」と気さくに勧めて下さるご住職の言葉に従い、お堂の鐘をつかせていただきましたが、その言葉どおり深い地の底まで響くような荘厳な音色に驚かされました。

左手に八坂神社を見ながら東大路を越えて松原通りを登つて行くと、謡いの詞章のとおりに經書堂、子安の塔の碑があります。その辺りを過ぎると急に視界が開け、清水寺仁王門の鮮やかな朱色が目に飛び込んでいます。熊野の道行きの謡いはここまでです。

道なりにすすんで觀光客で賑わう清水の舞台に上がってみると、曲の後半で熊野の日に映る都の景色そのままで、舞の型と詞章、さらに清水寺からの景色が一致していることに気づかされました。「南を遙に眺むれば」今熊野、稻荷山、その向こうには桂といった具合に、まるで觀光ガイドブックを手にしているような景色が広がります。と同時に『平家物語』の哀しさ、病床の母を憂う熊野の美しさ、都の春の華やかさなど、能「熊野」の魅力を改めて感じる道行でした。

当日の『高覧』を心よりお待ちしております。

廣田 幸穏

松原橋 対岸から東山へ  
ゆるやかな坂が続く

西福寺前の六道の辻の碑

店先の看板 愛宕寺の辺りか

六道珍皇寺の鐘はお堂の外から撞く

三寧坂の角にある経書堂

清水寺仁王門  
清水寺の舞台を臨む  
眼下は京都市内

平成十九年 鼎月吉日